

原告

徐■鎬

冒頭意見陳述

私は原告のひとりの徐■鎬です。浮島丸事件で死亡した徐斗峰の長男です。

当時、父・徐斗峰は、忠清南道天安郡広徳面広徳里で農業をしていましたが、一九四四年、労務者として徴用され、青森へ連行されました。

父が連行されたとき、私はまだ一歳、父の面影さえ覚えておりません。私が幼いとき、父がいないことを不思議に思って母にたずねると、母は「日本の戦争に連れて行かれて死んだ。」と答えるだけで、詳しいことは、何も話してはくれませんでした。父がどのようにして連行されたか、どこでどんな仕事をさせられたのか、そして何故死んだのか、母は語ろうとはしませんでした。語るにはあまりにもつらかったのだと思います。母は、きっと父が生きて帰ると信じて、それだけを支えに、まだ幼い私たち兄弟を必死で育てていたのだと思います。父が帰国途中、船の爆破で死んだことを、同郷で一緒に船に乗っていた朴セグオン氏に知らされたとき、母の嘆きと悲しみがどんなであったか、全家族の絶望がいかにわかりであったか、とても言葉で表すことはできないと思います。

父を奪った浮島丸事件。しかしその後、家族には遺骨も届かず、死亡通知さえありませんでした。ただ父の戸籍が、「舞鶴にて死亡」として、抹消してあるだけです。解放後、喜んで帰国の途にいたであろう父が、何故死んでしまったのか、浮島丸事件とは何であったのか、日本からは一言の説明もお詫びの言葉もなく、今日まで何も分からないままです。生還者の話や、新聞等の報道によれば、浮島丸は日本軍の陰謀により自爆した可能性が強く、死亡者の数も、一般に言われているよりもっと多いとのことでした。

「父は日本に使い捨てにされて、殺された。」と私たちは思っています。万一、事実が自爆ではなかったにしろ、

このままでは、私たちのこの思いは変わりません。母も祖母も日本を憎み恨んでいました。

私たちは犬や猫ではありません。いえ、犬や猫をたとえ誤って殺したとしても、お詫びがあるのが今の常識です。日本国は私たち朝鮮人を、犬猫以下とでも考えているのでしょうか。それとも、我々朝鮮人は足を踏まれても痛いと思わず、親が死んでも悲しいと思わないとでも思っているのでしょうか。使うときだけ使って、もはや用がないとなれば、虫けら同然に捨て置いて省みることさえしない日本。日本人にも人間の血が流れているのでしょうか。

父・徐斗峰は日本の戦争に動員され、日本軍の命令で浮島丸に乗せられて死にました。享年二十九歳でした。三十歳の妻と幼い二人の子供を残したまま、異国をさまよう恨み多い亡霊になってしまいました。

父の死後、すでに四十八年という長い年月が過ぎていきます。しかし年月が、私に父の無念を忘れさせることはありません。

日本国の公式陳謝と真相究明を求めます。「日韓会談ですべて片付いた、」等と、世界の誰も認めることのできない寝言を、いつまでも繰り返すのはやめなさい。

父の遺骨の引渡を求めます。遺骨を渡してもらわなければ、ちゃんとした祭祀もしてやれません。日本政府は何の権利があつて、東京目黒の祐天寺に預けてあると言う私の父の遺骨の引き渡し拒むのですか。

一九九三年十月十二日

原告 徐 ■ 鎬

京都地方裁判所御中